

——楽器製作者になろうと思われたのはいつ頃ですか？

加藤 高校2年のときでした。管弦楽団部（都立新宿高校）に入って高校1年からトランペットを始め、朝から晩まで熱中していたんですが、ふとトランペット製作者になりたいと思い始めました。普通のサリーマンになるのは嫌だったし、自分の手ですべてが出来る仕事をやりたい。現実離れた夢に思えますけど、トランペット製作は理想的な職業に思えます。

——モノを作るのが好きだった？

加藤 建築家の父の血筋もあるのかも知れません。中学時代はプラモデルを作ったり自転車やバイクを分解、改造したりしていました。爬虫類などを飼うのも好きで、小学校入学祝いにもらったカメレオンを5年以上飼育して日本最長記録をつくったこともあります。人とは変わった子供だったかも知れませんが。

——製作者になるために最初にやったことは？

加藤 某大手楽器メーカーに手紙を書きました。担当の方へ話を開けたんですが、入社してもトランペット作りの仕事に就ける保証はないと言われ、ガラガラと夢が崩れました。呆然と、その足で東京湾の方まで歩いて行き、海に面したベンチで考えているうちに、「ドイツに行くしかない！」という決心が固まり始めました。

それで、まずはドイツ語を習い始め、そのうち幸運にもベルリンフィル首席トランペット（当時）のコンラディン・グロートさんを人に紹介して頂き、氏から当時ヤマハにいらしたドイツのマイスターの免許を持つ梶吉宏さんに会うように

# BSCトランペットの源<sup>みなもと</sup>

## 欧州に学び、欧州から世界へ発信する 日本人トランペット製作者

ルクセンブルクに工房を持ち、世界の名手たちが注目するトランペットを作り続けている日本人がいる。加藤朋海さん……若くしてトランペット製作者になることを夢見てドイツに渡り、ヨーロッパの楽器づくりの技術と精神を学んで、ついには斬新なデザインを持つ独自のトランペットを開発、BRASS SOUND CREATIONの名で世界に発信している。

取材協力= (有) セレクト インターナショナル



勤められたんです。浜松で梶さんにお会いし、梶さんの親友で30年以上ドイツの楽器製作学校の先生をつとめるマイスター、ハンス・シュナイダーさんを紹介し



BSCトランペットを早くから評価し使用するウイントン・マルサリス氏と。

て頂きました。早速シュナイダーさんに手紙を書いたら、ちょうど新しい見習いを探していたという。それで晴れてドイツ行き「切符」が手に入ったわけです。親にはすべて内緒で行動していたんですが、未成年だったのでビザ申請には親の署名が必要になる。その朝電話で初めて親に事情を話し、ドイツ大使館まで来てくれるように親を説得しました。

### 理想の工房で修業できた

——シュナイダーという方はどんな製作者？

加藤 機械が導入される以前の、ネジの一つまで手作りしていた時代の技術を、当時ヨーロッパでは著名だったシュナイダーという楽器職人から受け継ぎ、それを金管楽器製作者学校で長年教えていた方です。いわば親方中の親方みたいな方。

楽器製作の工房はルクセンブルクにあるが、自宅とアトリエは写真のモーセル川を隔さんだドイツ側のニッテルという村（写真、川の左側の村）にある。村のまわりは見渡す限りのブドウ畑。

シュナイダーさんの工房には、中世時代の楽器製作のための道具から近代の機械までのすべてが揃っていて、金管製作の基礎を学ぶにはこれ以上ないというほど理想的なところでした。通常の楽器づくり以外でも、古い楽器の修理で部品を複製するなど、歴史的な名器の素材やつくりを学ぶことが出来たのも良い経験になりましたね。

シュナイダーさんは、それまでロータリーのBb管トランペットやピッコロトランペットを製作していましたが、私が修業した頃はトロンボーンも作り出した頃で、スローカー氏や、亡くなった山本雅章さんなどがアドバイザーとして工房に出入りしていました。シュナイダー夫妻には子供のように可愛がっていただきました。キリスト教への厚い信仰と他人への思いやりなど、ライバル意識の強いマ

Tomomi KATO

# 加藤朋海

●BRASS SOUND CREATION 代表 / 金管楽器製作者



この記事中の写真の工房は自宅のすぐ近くにあるアトリエ。設計や試作、完成品の最終チェックなどはここでやっている。奥にあるチューバは約150年前のもの。一時、トランペットに譲らず古い楽器の収集に凝っていたという。

イスターたちの中では人格的に抜きん出た方だと思っています。

——ドイツに渡られたのが1987年。3年後にはもうマイスター試験に合格されています。ものづくり（金属加工）の基礎から学ばれたのでしたら驚異的な早さなのでは？

加藤 マイスター試験はドイツの外では

高く評価されているようですが、業界内ではそれほど意味は持っていない。物理的な基礎は覚えればよいだけで、現実に仕事場で良いものが作れるとは限らないからです。職業学校では機械的・数学的な面でしか楽器を判断できませんし、マイスターの刻印が入った楽器でもプロの舞台では使えないものが実際には少なくありません。楽器の歴史に名を残す人となると、それこそ両手で数えられる程度ですよ。

私自身も肩書きなどは気にせず、トランペットの製作、開発、歴史、物理的背景などを出来るだけシュナイダーさんから学ぶように努力しました。機械や道具、素材などの条件には恵まれていましたし、見習い時代にはロータリーだけでなくウィーナー・ピストンヴァルヴや回転盤ヴァルヴなどを作れる環境は、ドイツでも非常に限られています。

——「KATOHORN」という楽器でマイスター試験に合格されましたが、どんな楽器ですか？

加藤 それまで勉強したものをすべて注ぎ込んだ作品でした。普通、楽器づくりでは試奏しながら理想の形に仕上げしていきますが、この場合は数学的、理論的にメンスール（パイプなどの内径形状や寸法）を計算し、それに沿って作ることを



数多くの試作品やプロトタイプが壁に掛けられている。主に吹管だがロータリーやフリューゲルも見受けられる。手前の楽器は完成品。

試みました。音程とメンズールの関係はすでに研究されていますが、音色とメンズールの関係はほとんど無視されて来たのが事実です。「音色が良い楽器は音程が悪い」というそれまでの常識にメスを入れたかったんです。また、偶然に頼らず、

予想と結果が一致するような楽器開発の道筋を自分なりにつけたかったということもありました。

シュナイダーさんの工房では、良い楽器も悪い楽器も片っ端から計測して、昔の人がやった失敗や成功を記録しました。そこから、名器と呼ばれる楽器にはある共通した点があることに気づいたんです。バックやベリオンジといった職人がフレンシチ・ベツソンをコピーしたことは知られていますが、もし背景を理解せずにコピーしてしまうと、オリジナルが持っていた欠陥までコピーしてしまうだけでなく、肝心のオリジナルの長所も正確には再現できなくなってしまう。そんな楽器は世の中に多いのですよ。

——シュナイダー氏の工房を出てからは？

加藤 ゲゼレ（職人）と

——それはどんなトランペット？

加藤 あるメーカーのものを使っているけども、本当に気に入って使っていると、言うよりは、他に良いものがないから仕方なく使っているというプレイヤーの「本音」をいろいろ聞いてましたから、彼らが求めているその「何か」を私なりに突き止める仕事の第一号機だったと位置づけられます。このトランペットのおかげでヨーロッパの金管楽器の業界内で知名度が高まり、その後いろんなメーカーや工房からの依頼が舞い込み始めました。それに対応するため1995年にフリーのデザイナーとして独立したんです。

——この業界でフリーのデザイナーというお仕事はどんなもの？

加藤 立場はフリーですが、依頼があればトランペットの設計から素材の設定、製造工程の設定、労働者のトレーニング、プレイヤーとの試奏開発、広告のデザインまですべてに責任を持ちます。ここでは名前を挙げられませんが、さるお金持ちが私の所にやって来て、自分のブランドで新しい楽器を開発したいというので、何もなかったガレージに工房から職人までのすべてをセッティングしたことがあります。

—— B S C (BRASS SOUND)

## BSCトランペットの源

●加藤朋海



CREATION) トランペットの開発を始めたのは、

ヨローロッパの音楽性を組み込んだピストン・トランペット

加藤 1996年からです。

——そのアイデアはどこから？

加藤 現在のピストン・トランペットのほとんどはフランスで開発されたフレッチャー・ベッソンに基づき、20世紀前半のアメリカでアメリカの音楽観の下で開発されて来ましたが、BSCトランペットの音楽的な発想のルーツは、中央ヨーロッパでクラシック音楽が生まれた18、19世紀まで遡ります。音楽史に名を残している重要な作曲家のほとんどはトランペットの音色を、ナチュラルトランペットかロータリートランペットの音色をイメージして作曲しています。ピストンヴァルヴの故郷であるフランスでも、ナチュラルトランペットはピストンが発明された後も長くトランペットとして使われ続けました。

BSCの楽器は、クラシック音楽が生まれ育った環境の中で、その伝統的な音楽観に基づいてピストン・トランペットを開発していくという、歴史的にこれまでになかった視点から始まっています。ちなみに、ドイツ語圏では伝統的にピストン・トランペットは

「ジャズ・トランペット」と呼ばれ、クラシックに対応するような楽器の開発は行われていません。

——ということば、BSCトランペットはドイツ・トランペットとピストン・トランペットを融合させたものということば？

加藤 ある意味ではそうだと考えますが、設計者としては「ピストン楽器にヨローロッパの音楽性を組み込んだもの」だと思っています。モーツァルトの《レクイエム》からドビュッシーの《海》、《ウェストサイド物語》や《キャッツ》まで幅広い分野で、そのスタイルに合った音が出るような柔軟性を持たせたかったんです。

——具体的にBSCトランペットの特徴を教えてください。

加藤 演奏の際、人によって音の中心を使うか、音の外側の輪郭を使うかといった違いがあるのですが、ヨローロッパ本土では「一人の歌声」のように音の中心でメロディを奏でるのに対し、イギリスやアメリカでは音の輪郭を重視します。BSCトランペットは、音の中心からコンサートホール全体に広がるような性質を大事にしていますので、雑音が少ない「純真」な音色が出せます。音の中心が散らない楽器はアンサンブルでも和音が作りやすくなりますね。これはヨローロッパ本土では声楽やほかの管楽器、弦楽器、打楽器にさえも共通していわれることなんです。

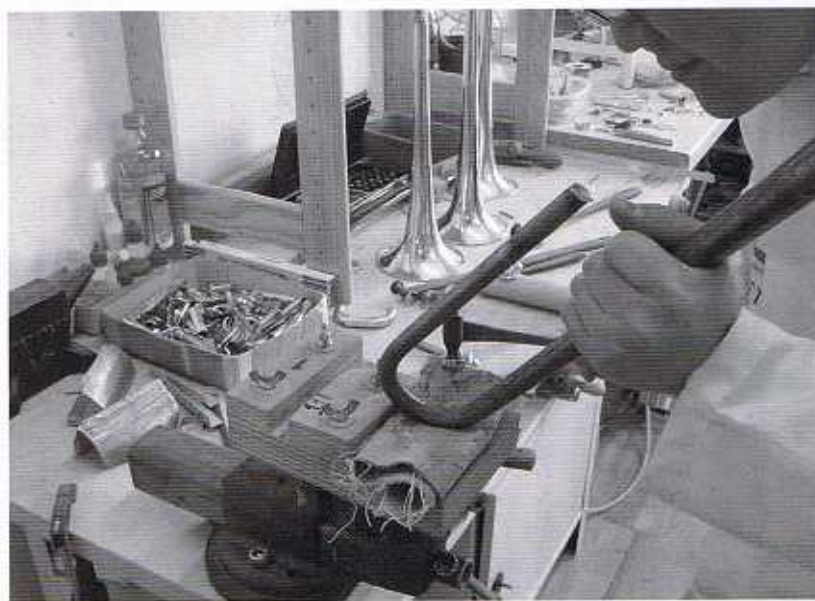
音の輪郭で演奏する人は、音を水蒸気や霧のようにとらえて演奏しています。ソロで吹くとマイルドで耳障りが

クラシック音楽が生まれ育った環境と伝統的な音楽性に基づいてピストン・トランペットを開発するということ、歴史的にこれまでになかった視点。

なく、自分には美しく響いているように聞こえますが、

案外、半径3メートルを超えると響きが減衰して、聞く人には音の立ち上がりや終わりが曖昧に聞こえたりします。一部の業界ではマイクを使うのが常識となっていてしまっていますが、半径3メートル以内で鳴るような楽器は、マイクで拡大させないと観客に音が伝わりません。

こうした違いはアンサンブルの際には致命的になりかねません。もし全員が音の中心を持たずに水蒸気のような音で演奏したら、舞台の上がサウナのように曇るだけでなく、音の遠達力がないために客席には音量の大きいトロンボーンなどの音しか届かないこととなります。そんな音でシューマンやワーグナー、ブ



ベル加工を実演してみせる加藤さん。

ルククナーなどを演奏されたら、作曲家のイメージとは全く異なってしまわいですよ。

これに対してすべての楽器が音の中心で演奏された場合、いろいろなスポットライトが輝くように当たる華やか

## BSCトランペットの源

●加藤朋海

でクリアな音響環境が醸し出されて、クラリネットやファゴットなどの細かな動きさえ聞き取れるチャンスが出て来ます。

とは言ってもBSCトランペットの音は、クレッシエンドする際、ホースから出る水の強さが増して行くように音が大きくなるのではなく、電灯の明かりが明るくなるように広がる感じですので、他の楽器の音色とぶつかり合うことがありません。弦や木管楽器とも音が溶けやすく、ピアノシモや低音でも他の楽器にかぶされずにリラックした演奏ができるはずですよ。

——ウィントン・マルサリスが早くからBSCトランペットを認めたことは有名ですが、同時にドイツのオーケストラ奏者たちからも高い評価を得ています。

加藤 以前、楽器を開発していたとき、10種類以上のパリエーションを欧米の様々なジャンルのトップ奏者に吹かせてもら、優れた人であればあるほど一つのモデルに集中するという結果が出ました。舞台経験の多い人ほど、舞台上で本当に必要とする音のコンセプトをはっきりと持っています。最高レベルの音楽家が楽器に求めるのは、演奏環境でのギャップ（ホール内での音響や他の楽器の音、自然雑音など）の中で、自分の「ヴォイス」を正確に聴く人に伝えてくれることだと思いますね。

またジャズの名手たちは、音響の良いホールではマイクを使わなくても良い演奏ができるようなクラシック同様の音を選んでいきます。往年のジャズの名手の音色を分析していくと、ドイ



上の写真は、C管と出荷直前のBb管。一番手前はドイツ国内専用モデルTR-107S "West Coast"（現在のところ日本での発売予定なし）。奥から2、3番目が完成期近のC管。

左の写真はC管。奥から順に開発が進んだ。マウスピースレシーバーや支柱をはじめ、外見からは分からない部分に至るまで様々な試行錯誤を経て手前の形に辿り着いた。音色や演奏感、音程など多くの点で試奏した人たちが高い評価を得たという。

最高レベルの音楽家が楽器に求めるのは、自分の「ヴォイス」を正確に聴く人に伝えてくれること



ドイツ側のアトリエからモーゼル川をはさんでルクセンブルグ側を見る。

ツの伝統的なオーケストラの要求する音色と基本的には変わらない部分があることも分かりました。サッチモ、クリフォード・ブラウン、ハリー・ジェイムス、マイルス・デイヴィス、チェット・ベイカーなど、フォルテでも決して音を割らずに、常に音の中心で温かく音楽を奏でるハーモニックな音の持ち主で、これはクラシックの音楽の価値観とまったく同じものです。唯一の差といえば、黒人の感じる「温かみ」と、ヨーロッパ人の求める「華やかさ」からくる「音の形付け」の違いくらいだと思います。

——C管も開発中とのことですが。加藤 Bb管を見せるたびに「こんな楽器がC管にもあれば」という声が多かったため、C管の開発も始めました。C管の故郷フランスで2006年にテスト販売を開始したところ非常に好評です。NYフィルのフィリップ・スミス氏などにも試作品を非常に気に入って頂いて、開発の際にいろんなアドバイスを頂きました。いま製作準備に入っていて、試作品はすでにフランクフルト・オペラで使われています。

## 美味しいワインの産地で

最後に、工房をルクセンブルグに置かれた理由は？

加藤 ルクセンブルグの中でもここはモーゼル川沿いのワインで有名な場所です。前からここに事務用のオフィスを構えていたんです。金曜の夜に帰って来て、バンドの練習の後に飲むワインは本当にストレスを解消してくれます。ゆつたりと流れる川沿いのぶどう畑の景色に加え、ワイン産地の人たちはとても親切で非常にこまめな賢い人が多く、これ以上すばらしい場所はないと思つてルクセンブルグを本拠地にすることに決めました。ニューヨークやロンドンからの誘いもあったのですが、結婚して子供ができた今、ますますその価値を噛みしめています。

いずれ世界の有名奏者を招いて、「南モーゼル・サマークリニク」をどうワインや自然を通して人間と音楽の関係を見直す機会をつくる予定ですので、その際には日本からもぜひ多くの方に参加して頂ければと思っています。■